

令和7年度 学校評価重点目標及び取組と評価指標

令和7年7月

	本年度重点目標	具体的な取組	評価指標	判定基準	集計結果	自己評価	分析(成果)(課題と改善策)	最終評価
学びに向かう力の育成と学力向上	【学びが楽しい学校づくり】 体験活動や学び合いを基に、一人一人が活躍すると共に共感的な人間関係づくりが図れる授業を目指し、学習意欲の向上と自己肯定感を高める。	・震災後の児童の心のケアを、外部の専門家とつながらりながら継続して行っていく。 ・生徒指導の4つの視点（自己存在感の感受・共感的な人間関係の育成・自己決定の場の提供・安全・安心な風土の醸成）を生かした授業づくりを行う。 ・学び合いを充実させるために、児童自身が課題意識をもって主体的に学びたいとなるような授業を目指す。また、基礎基本が定着するように粘り強く指導する。 ・教科間や学級活動、学校行事とのつながりを意識し保護者や地域の方々と共に計画的に学習を進めていく。	(児童アンケート) 「学校で学ぶことは、楽しいですか。」 ア 楽しい イ だいたい楽しい ウ あまり楽しくない エ 楽しくない (保護者アンケート) 「子どもは学校へ意欲的に登校していますか。」 ア 意欲的に登校している。イ おおむね意欲的に登校している。 ウ あまり意欲的ではない。エ 意欲的ではない。 (教職員アンケート) 「生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりに努めている。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない 「基礎基本の定着を粘り強く指導している。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない	児童アンケート・保護者アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが80%以上 D…それ以下	(児童) 95% (保護者) 95% (教職員) 100%	A	(成果) ・児童、保護者、教職員のどの項目においても肯定的な回答が95%以上であった。高学年において、 ・では、アの割合が昨年度末より、僅かに増加している。 ・学び合いを充実させた授業づくりと、委員会代表委員会などによる話し合いの場の設定など児童が主体的に学校生活を送っていることが結果につながっていると考えられる。 ・5年生の珠洲音頭継承や6年生の飯田つと燈籠山祭りの運営など、高学年児童を中心に地域と学校がつながりながら学びを進めていくことができた。 (課題と改善策) ・低学年において、ウとエの回答が8.6%であった。低学年においては、生徒指導の4つの視点をさらにきめ細やかに児童と関わっていく必要がある。 ・「学校で学ぶことは、楽しい」ということは、勉強ができたわかったという感じる必要がある。そのために、教師が価値づけたり友達に認められたりする場を意図的に増やしていかなければならない。	A
	【主体的に課題解決する児童の育成】(学校研究) 個別最適化された学びと協働的な学びの実現を目指し、教科の学びを課題解決へとつなげることが出来る児童を育成する。	・各教科で身につけさせたい資質能力の習得につながる学習活動や学び方を複数用意し、児童が自分に適したものを選択できるようにする。 ・各単元で、どのような力をつけさせることをねらうのか、そのためにどのような手立てが必要なのか検討して指導を行う。 ・児童が自分の学びを振り返ることを設定し、自己の成長のために主体的に学ぶことを促す。	(児童アンケート) 「自分の学びを振り返り、次の学習につなげた。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (教職員アンケート) 「子どもたちに学び方や学ぶ内容を選択させる場面を設定した。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (単元末テスト) ア 平均80ポイント 全員7/7 イ 平均60ポイント全員7/7 ウ 平均60ポイント 一部7/7 エ 平均60ポイント以下	児童アンケート・教職員アンケート・単元末テストともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが80%以上 C…ア+イが70%以上 D…それ以下	(児童) 92% (教職員) 88% (単元末テスト) 100% ア 1学級 イ 5学級 ウ 0学級	B	(成果) ・単元の最初に、どのようなことを学習するのか、どのような姿になることを目指すのかなどについて児童と共有し、「単元シート」として教室に掲示することで、単元のゴールを意識して主体的に学ぶ姿が見られるようになった。 ・単元の中で、児童にどのように学ぶのかや何を学ぶのかについて選択する場面を設定することで、自分にあった学び方を主体的に選択して学ぶようになった。 (課題と改善策) ・単元末テストの平均点が全員8割を超えた学級は1クラスであった。教職員の単元を構成する力を高め、その単元でつけた資質能力を明確にすることで、力をつけるのに適した学習につなげる必要がある。 ・「自分の学びを振り返り、次の学習につなげた。」の項目では、高学年の児童でアと回答したのは48.1%と低かった。単元で目指す姿や、つけた力を明確にして共有するだけでなく、なぜその力をつける必要があるのかなど目的意識を高く持つよう指導する。また、ゴールに対しての達成状況を振り返り、次の授業でのめあてを考える時間を設定する必要がある。	B
	【家庭学習の確立】 保護者と連携し、子どもたちの家庭学習の習慣化を図る。	・音読や漢字・計算練習(高学年は自学ノート)を基本に、学年に応じた家庭学習の時間を確保する。 ・家庭学習強化週間は特に、お便り等で呼びかけを行う。 また、学級懇談では、家庭学習のてびきを活用し日頃の家庭学習の取組について確認し、改善していく。必要に応じて、個別指導も行う。 ・一日の最後に、学びを振り返る時間(ぐんぐんタイム)を設定し、家庭学習の計画を立てるように促す。	(家庭学習調査結果) ・家庭学習強化週間記録カードをもとにした、家庭学習の目標(低学年20分・中学年40分・高学年60分以上)達成者数 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 60%未満	A…ア B…イ C…ウ D…エ	エ 42%	D	(成果) ・児童アンケートの「毎日、宿題をしている。」では、肯定的な回答の割合が100%、保護者アンケートの「お子さんは家庭学習の習慣が身につけてきていると思いますか。」の項目では、肯定的な回答が80.7%であり、宿題をする習慣は、多くの児童が身につけていることがわかる。 (課題と改善策) 五月の調査では、各学年の目標時間の達成者の割合が42%と低かった。子ども教室で宿題を終えると家庭で更に学習しようとする児童が少ない。また、平日は目標時間を達成しているが、休日には学習していないといった様子も見られる。 ・家庭学習の意義を児童と共有し、宿題の他にどのような学習が自分自身に必要なのか考える時間を「ぐんぐんタイム」の中に設定したり、家庭学習の計画を保護者と一緒立てるように促したりすることで、宿題以外の学習にも取り組む習慣をつけさせたい。	D
いじめ・不登校のない学校づくり	【特別活動の充実】 学級生活や学校生活をよりよくするために、児童同士の関係作りを進め、課題を発見し、話し合い、合意形成を図り、意思決定して課題解決に向かう児童を育成する。	・学級活動や代表委員会、委員会活動等において話し合う活動の時間を確保する。 ・児童が自主的・実践的に取り組むことを通して、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、課題を共有し、合意形成しながら解決に向かわせる。 ・週1回以上ホワイトボードミーティングを行う。	(児童アンケート) 「友だちの考えを聞きながら、自分の考えを話そうとすることができている。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない (教職員アンケート) 「児童同士の話し合いの場を設定し、課題意識の共有・合意形成が図られるように取り組んでいる。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない	児童・教職員アンケートで A…児童ア+イが90%以上かつ職アが100% B…児童ア+イが80%以上かつ職ア90%以上 C…児童ア+イが70%以上かつ職ア80%以上 D…それ以下	(児童) 90% (教職員) 55%	D	(成果) ・肯定的な回答を行った児童の割合は全体で9割に達している。よりよい学校生活にするために、1人1人が友達の考えを聞き、自分の考えを話そうとする態度が身につけてきていることがわかる。 ・教職員の強肯定的割合は5割に留まったが、肯定的な回答で見ると全職員が肯定的な回答をしており、目指す児童の姿に向けて話し合う場を設定していることがわかる。 (課題と改善策) 児童においては肯定的な回答が多数を占める一方で、約1割の児童が否定的な回答をしている。お互いの考えを聞き合うことの良さを児童に伝えていく必要がある。また、教職員においては強肯定的割合を多くしていきたい。そのために、共通の取り組みを継続していくとともに、各学級での取り組みを共有し、話し合う場の設定の仕方について校内研修等を活用して職員の技能を高めていく。	D
	【規範意識の高揚】 社会的なルールやきまりの意味を理解させ、大切にすることを高め、いじめや差別、暴力のない学校をつくる。	・毎月、代表委員会を中心に学校目標を設定し、社会的なルールやきまりに対する理解を深めるとともに、自ら進んで守ろうとする態度を育てる。 ・全職員が全校児童の担任であるという意識を持ち、児童の様子を観察することで、いじめの兆候の早期発見を目指す。さらに、学期に1回程度いじめ撲滅集会などを通して、いじめや暴力行為のない学校づくりを目指す。	(児童アンケート) 「代表委員会による学校目標が守れましたか。」 ア できた イ どちらかといえばできた ウ あまりできなかった エ できなかった (保護者アンケート) 「学校は、いじめや暴力行為のない学校づくりに努めていると思いますか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ あまり思わない エ 思わない	児童アンケート・保護者アンケートともに A…ア+イが95%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが75%以上 D…それ以下	(児童) 94% (保護者) 100%	B	(成果) ・児童アンケートでは肯定的な回答が94%であり、学校全体で生活目標を守ろうという規範意識が高まっていると考えられる。代表委員会を中心とした学校全体での取り組みが効果的に働いている。 ・保護者アンケートでは対象の項目の肯定的な回答が100%だった。いじめ未然防止のためのいじめアンケートや、保護者からの相談に素早く対応し、早期解決を図ることができた。 (課題と改善策) ・少数ではあるが、否定的な回答した児童がいる。なぜそのような目標になったのか、達成するために自分達に何が必要かが明確にするために、各学級で代表委員会が決めた目標について考える場を設定するとよい。	B
学校と家庭地域の連携	【自己健康管理能力の向上】 めあてを持って、自らよりよい生活習慣を実践しようとする態度を育成する。	・「早寝早起き朝ごはん」をはじめとした規則正しい生活習慣の確立を目指し、学期毎に「バランスアップ週間」を設定して取り組む。 ・児童会で「就寝時刻」「起床時刻」「メディア時間」のめあてを決め、保護者の協力を得て達成度チェックを行い、よりよい生活習慣の実践を目指す。 ・学校保健委員会を開催する。	(バランスアップカードの結果) ・早起きのめあて(7時まで)に起床する)が達成できたか。 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 50%未満	バランスアップカードで A…ア B…イ C…ウ D…エ	めあて達成度 88.5% (平日96%・休日81%)	A	(成果) ・5月のバランスアップ週間の起床時刻調査で、学校のめあて達成率は89%。 ・平日休日を問わず、一定の生活リズムを作るために昨年度から起床時刻のめあてを7時とし、児童保健委員会で大切を呼びかけていることで達成率はアップしている。平日と休日の時間差は1時間以内が望ましいが、1時間以上の児童は数人で限定してきた。 (課題と改善策) ・起床時刻を決めてしっかり意識して取り組めば新しい「習慣」になる。必要な児童には保護者も含めて個別指導を行う。覚醒は自分の意志でコントロールできるので継続して指導と取組を行っていく。	A
	【家庭・地域との連携協力体制の確立】 家庭や地域と学校との繋がりを大切に、PTAや学校運営協議会を中心にして協働をはかる。	・保護者・地域とつくるカリキュラムの実践を進め、地域とつながる場を設定する。 ・学校ホームページ、学校だよりや学級だより等を通じて、学校の様子を知らせる。 ・熟議等を通して、震災後の諸課題について家庭・地域とともに考えていく体制づくりをする。 (学校運営協議会への参画)	(保護者アンケート) 「学校は、学校評価アンケートや学級懇談会、学校運営協議会などを通して、保護者や地域の思いを受けとめ、よりよく改善しようとしていると感じますか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ 思わない (教職員アンケート) 「学習状況や学校生活の様子、担任の思い等を学校だより、学級通信、HP等で情報発信を行い、保護者との連携が図られている。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (保護者・地域とつくるカリキュラムを実施している。) ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった	保護者アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが80%以上 B…ア+イが70%以上 C…ア+イが60%以上 D…それ以下	(保護者) 100% (教職員) 100% (教職員) 100%	A	(成果) ・保護者アンケート、教職員アンケートいずれも肯定的な回答が100%となった。教職員アンケート「情報発信を行い、保護者との連携が図られている」において、アと回答した割合は昨年度より増加した。全教職員が保護者・地域とつくるカリキュラムづくりを意図的に実践し、保護者と連携した取組を進めてきたことが保護者アンケートの100%につながったものと考えられる。 (課題と改善策) ・学校だよりや学級だよりや学校ホームページ等で情報を発信し、今後も、子どもを中心とした学校教育への理解を図っていく。また、保護者・地域とつくるカリキュラムにおいては、保護者・地域と協働し、一層の連携を深めていく。更に、活動の意義や目的を子どもと共有し、保護者や地域の方に対する感謝の気持ちを育てていきたい。	A
業務改善	【業務改善】 教職員が、心身ともに健康で、明るく元気に児童と向き合うため、一月の超過勤務を45時間以内に抑える。	・毎月、第3水曜日を定時退校日とする。また、個別で毎月2回マイ定時退校日を設ける。 ・予定退校時刻を設定し、週案に記載することで、時間管理を意識した働き方を推進する。 ・最終退校時刻は、19:00とする。 ・行事の内容精選や準備の縮小を進め、計画的に企画・提案を行うことで業務軽減を図る。 ・8月12日～15日、4日間を学校閉庁日とする。 ・PTAの会合等で取組に対する理解を求める。	(勤務時間調査) ア 19時超過が月4日以下、且つ、全員の超過勤務が45時間以内 イ 19時超過が月4日以下、且つ、平均の超過勤務が45時間以内 ウ 19時超過が月8日以下、且つ、全員の超過勤務が60時間以内 エ 19時超過が月9日以上、且つ、平均の勤務時間が60時間以内 (教職員アンケート) 「困ったことを言い合ったり、挑戦する場があったりして働きやすい。」(働き甲斐がある) ア そう思う イ だいたいそう思う ウ あまりそう思わない エ 思わない	勤務時間調査と教職員アンケート A…ア+イが90%以上 B…イ+ア+イが80%以上 C…ウ+ア+イが70%以上 D…エ+ア+イが60%以下	(勤務時間調査) 超過勤務平均月6日 全員の超過勤務60時間以内 (教職員) 100%	C	(成果) ・19時以降の超過勤務の日数については、個人差があるものの平均すると一人あたり月6日であった。また、一月の超過勤務時間は、各自平均すると60時間以内である。全職員一斉の定時退庁日や個々のMyy定時退庁日を設定したり、日常的に19時退庁を呼びかけたりしている。また、働き甲斐があると肯定的に捉えている教職員は100%であった。 (課題と改善策) ・計画的に準備を進めていても学期始めや学期末は、業務が増え超過勤務となってしまう。また、行事担当者等、一部職員の勤務時間が超過している。全ての教職員が19時に退庁できるような業務を見直しや業務の分担等を推進し、担当者の負担を減らす。また、年間の超過勤務が360時間を超えないように、勤務時間を意識した働き方についてお互いに声をかけ合っていく。	C

評価: A 達成 B おおむね達成 C・D 改善が必要